

カミングアウトが性的マイノリティ当事者の 自尊感情に与える影響

—カミングアウト直後の相手の反応と現在の関係性に着目した検討—

修士課程1年 原 紘 紀

〈要 約〉

性的マイノリティ当事者が自身のセクシュアリティを他者に明言するカミングアウトが、当事者の親や友人、パートナーとの関係性にどのような影響を与えるか、そしてカミングアウト結果が当事者の自尊感情にどのように影響するかを質問票を用いた調査によって明らかにした。また、当事者のカミングアウトを促進もしくは抑制する要因についても併せて検討した。その結果、カミングアウト直後の相手の反応そのものが当事者の自尊感情に影響を与えるという結果は示されなかったが、親と友人に対するカミングアウトでは直後の相手の反応が良いと現在の関係性も良い傾向にあることが示され、また、親との現在の関係性のみ、関係性が良い方が自尊感情が高いという結果が示された。加えて親へのカミングアウトの抑制要因として関係悪化の懸念が認められたことから、カミングアウトにまつわる支援では特に親との関係調整が大切であるということが示唆された。

〈キーワード〉 LGBTQ+, カミングアウト促進要因, カミングアウト抑制要因, 状態自尊感情

問題の背景

1. 性的マイノリティ

性的マイノリティとは、性的なあり方についてのマイノリティである。特に代表的であるレズビアン (Lesbian)・ゲイ (Gay)・バイセクシュアル (Bisexual)・トランスジェンダー (Transgender) の頭文字をとった LGBT という言葉や、そこに他の要素を加えた LGBTQ+などの言葉で表現されることもある。

性的マイノリティと関連する概念として、セクシュアリティがある。セクシュアリティ (sexuality) は直訳すると「性的なこと」であり幅広くあいまいな概念ではあるが、主

として個人の人間の中核的特質の一つを指すものとして用いられる (針間, 2014)。

また、セクシュアリティには、セックス (生物学的性)、ジェンダー・アイデンティティ (性自認, 性同一性) とジェンダー・ロール (性役割), 性的指向, エロティシズム, 喜び, 親密さ, 生殖が含まれているとされている (東・中尾, 2015)。これらのうちジェンダー・アイデンティティと性的指向, それに「出生時に割り当てられた性別 (sex assigned at birth)」を加えた3つの組み合わせに関するマイノリティが、主に性的マイノリティと呼ばれる (石丸, 2022)。よって本研究では基本的に、性的指向やジェンダー・アイデンティティのありようを指す言葉として「セクシュアリティ」を使用する。

1-i. セクシュアリティを構成する概念

出生時に割り当てられた性別（以下、割り当てられた性別）とは、日本においては戸籍法に基づき出生後14日以内に役所に登録した性別であり、男女の2種のみである（石丸, 2022）。

ジェンダー・アイデンティティ（gender identity）は一般的に、自分がどのような性別であるかという認識のことを指す。代表的な定義が2つあり、一つは「自分が所属している性別について知っているという感覚のこと、すなわち『私は男性／女性である』という認識のこと」（Stoller, 1964）、もう一つは「男性あるいは女性、あるいはそのどちらとも規定されないものとしての個性の統一性、一貫性、持続性」（Money, 1965）というものである。日本語では「性自認」と訳されることも多いが、佐々木・尾崎（2007）は単なる自認としてではなく、ある性別に対するアイデンティティとして統一性、一貫性、持続性の側面から捉える必要があると指摘している。本研究ではこれらを踏まえ、ジェンダー・アイデンティティを「ある程度の一貫性を持った、自身の性別に対する認識」とする。

ジェンダー・アイデンティティは多くの場合で割り当てられた性別と一致しており、そのような者はシスジェンダーと呼ばれる。一方で、割り当てられた性別とジェンダー・アイデンティティが一致しない者もあり、そのような者はトランスジェンダーと呼ばれる。トランスジェンダーのうち、割り当てられた性別が女性でジェンダー・アイデンティティが男性である者をトランスジェンダー男性、割り当てられた性別が男性でジェンダー・アイデンティティが女性である者をトランスジェンダー女性と呼ぶこともある。また、男女どちらにも当てはまらないジェンダー・アイデンティティを持つ者はXジェンダーとも呼ばれる。

性的指向（sexual orientation）は、どの

ような相手に性的魅力を感じるかということを目指す。外的な働きかけや本人の努力によって変化しにくいニュアンスを込めるために志向ではなく指向と表記することが通例である（石丸, 2022）。異性に惹かれる異性愛や同性に惹かれる同性愛のほか、男女両方に惹かれる両性愛（バイセクシュアル）、性的に惹かれる相手の性別を問わない全性愛（パンセクシュアル）、他者に対して性的魅力を全くもしくはほとんど抱かない無性愛（アセクシュアル）など、さまざまな性的指向が存在している。相手が異性か同性かということの判断基準については性自認を起点とした相対参照表現を用いることが多く（石丸, 2022）、同性愛者のうち、主に男性の同性愛者はゲイ、女性の同性愛者はレズビアンと呼ばれることもある。

2. カミングアウト

カミングアウトとは、自分以外の他者に対して自らのセクシュアリティを明確な形で宣言することを指しており、反対に自らのセクシュアリティを周囲からの圧力もしくは抑圧や権力によって表明することができない状況はクローゼットと呼ばれる（金田, 2003）。現在ではセクシュアリティだけでなくなんらかの秘密を打ち明ける際にも使用されることが多いが、本研究においては引用などを除き、自らのセクシュアリティを公表する場合に限って「カミングアウト」という語を使用する。

カミングアウト（以下、CO）の動機として、鈴木（2018）では自分のセクシュアリティを知って適切な付き合い方をしてほしいという気持ちが挙げられている。田中・今城（2021）においても、ありのままの自分を知ってもらってより良い関係を築きたいという考えがCOに繋がっている可能性が示唆されているが、関係の悪化を恐れることがCOできない要因であるという結果も示されている。桐原・坂西（2003）は、COをすることによって「隠し事をしている状態」から

解放され、それがCOをして良かったという実感に繋がると述べている。一方で自発的とは言えないCOの例も報告されており、丸井(2020)では性別違和を抱える子ども達は自身のセクシュアリティを隠すのが難しい状況に追い込まれた結果、やむを得ずCOしていることが分かっている。また、武内(2021)は、他者からCOを受け容れられることが自らのセクシュアリティを受容することに繋がると述べている。

しかし、必ずしも、COの結果セクシュアリティが受容されて相手との関係が良くなるとは限らない。鈴木・池上(2020)では、親友からCOを受けた異性愛者は、同性愛者一般には肯定的になるもののその親友に対しては回避的になるという結果が示されている。

3. 状態自尊感情

自尊感情(self-esteem)とは、自尊や自己受容などを含めた自分自身に対する感じ方のことであり、自己の価値と能力に関する感覚および感情のことである(内田・上埜, 2010)。Rosenberg(1965)は、自尊感情を自分を「とてもよい(very good)」と感じる側面と自分は「これでよい(good enough)」と感じる側面という2つの異なった側面から捉え、後者の側面を測定する尺度を開発した。本研究においても、自分自身に対する受容的な感じ方としての自尊感情を扱うこととする。

また、自尊感情を、状況によって変化する「状態自尊感情(state self-esteem)」と比較的安定した「特性自尊感情(trait self-esteem)」の2つに分けて捉えることが可能であると考えられる研究がいくつかある。Heatherton & Polivy(1991)は、自尊感情の短期的な変化を測定する尺度を開発し、能力・外見・社会的受容といった領域におけるその時点での自尊感情を測定している。Leary, Tambor, Terdal, & Downs(1995)では、他者から受容されるか拒絶されるかということが状態自尊感情に影響を及ぼすことのほか、個人的な理由によってグループから

排除された時に自尊感情が低下するという結果が示されている。また、日本においても阿部・今野(2007)がRosenberg(1965)の自尊感情尺度をもとに状態自尊感情尺度を作成しており、他者から受容されていると感じると状態自尊感情が高くなり、逆に他者から拒否されていると感じると状態自尊感情が低くなることを確認している。

COおよび受容体験と状態自尊感情の関連についての研究では石丸(2005)があり、受容体験そのものがセクシュアル・マイノリティ当事者の自尊心を上昇させるが、COの有無による差は見られないという結果が示されている。しかし、石丸(2005)で示された結果は質問紙上で行った「想像上」のもの、なおかつ想定したCOの相手も初対面という設定であることから、身近な他者では異なる知見が得られる可能性は否定しきれない。

また、鈴木ら(2020)のようにCOをした相手との関係が悪化することもあり得、その懸念はCOの回避に繋がり(田中ら, 2021)、当事者は「隠し事をしている状態(桐原ら, 2003)」であり続けることになる。一般的に、COの結果が関係性に影響を与えることへの不安は、初対面の相手より既に関係が築かれた身近な他者へのCOの方が大きいと考えられる。よって、石丸(2005)では検討できていない、家庭や学校・職場で毎日接するような相手へのCOについての研究が必要だと考えられる。

そのため本研究では身近な他者、家族の中でも特に親、加えて友人、そしてセクシュアリティのあり方が関係性に影響を与える可能性が高いパートナーに対する実際のCO経験に関する調査を行い、親・友人・パートナーとの関係性にCOがどのような影響を与えるかを検討する。

目的

本研究では、CO 経験の実態および CO が周囲の人々との関係に与えた影響を明らかにし、それが性的マイノリティ当事者の自尊感情にどのような影響を与えるかを明らかにすることを目的とする。また、本研究で得られた知見から CO が当事者にとってどのようなものであるかを明らかにし、それを通して当事者に対する心理的支援を考える糸口としたい。

自らの「中核的本質（針間，2014）」の一つであるセクシュアリティを受容されたと感じられる経験は、自尊感情の向上に繋がると考えられる（Leary, et al., 1995；阿部ら，2007）。そのため、本研究における仮説を次のように設定する。

仮説：親や友人、パートナーなどの身近で重要な他者から CO を受容されたという経験がある性的マイノリティ当事者は、そうでない当事者と比べて CO 経験想起時の状態自尊感情が高い。

方法

1. 調査対象者

本研究は、性的マイノリティ当事者を調査対象者とした。シスジェンダーかつ異性愛者ではないセクシュアリティを持つ者であれば、CO 経験の有無や年齢、セクシュアリティは問わなかった。

2. 研究の手続き

2022年8月27日から2022年9月10日にかけて、縁故法や当事者団体のコミュニティスペースを通じて調査協力者を募り、協力の意思を示した者に対してオンライン上で Web 質問票の配布を行った。

調査の結果、30名から回答を得た。そのうち2名はシスジェンダーかつ異性愛者で

あったため分析対象から除外し、28名（18～52歳，Mean = 27.71歳，SD = 8.07）を分析対象とした。28名のセクシュアリティは表1に示した。

得られた量的データの分析には、清水（2016）が作成した統計分析ソフト HAD ver.17_206（ソルバーオン ver.）を用いた。自由記述項目への回答は、川野（2018）を参考にしつつフレーズごとに区切ってコード化し、それぞれのコードごとに内容が類似している、あるいは CO の目的など共通した物事に言及していると考えられるものを集めて分類し、カテゴリ化を行った。

表1 分析対象とした回答者のセクシュアリティ

性別属性	性的指向	
シスジェンダー		
女性	4	
男性	3	
トランスジェンダー		
女性	2	
男性	7	
Xジェンダー		異性愛 3
女性割り当て	6	同性愛 7
男性割り当て	1	両性愛 9
わからない	1	無性愛 2
その他	4	その他 7
合計	28	28

3. 質問票

本研究で使用した質問票は Microsoft Forms で作成され、①親・友人・パートナーへの CO 経験について尋ねる項目群、② CO をした相手との関係性について尋ねる項目群、③当事者コミュニティなど、あえて CO をしなくてもセクシュアリティを隠さないで居られる場について尋ねる項目群、④状態自尊感情尺度（阿部・今野，2007）、⑤回答者の属性について尋ねる最終項目群によって構成された。回答の所要時間は10～15分程度だった。

- ①親・友人・パートナーについて、それぞれ
 (i) CO 経験の有無, (ii) CO を自発的に行ったか、もしくは CO を行おうと思ったことがあるか、(iii) CO をした、もしくはしなかった理由について尋ねた。
- ② CO をしたことがあると回答した者へのみ、(i) CO 直後の相手の反応、(ii) CO をしてからまでの時間、(iii) CO をした相手との現在の関係性について尋ねた。
- ③ (i) 自助グループやサポートグループへの参加経験について、(ii) 性的マイノリティ当事者を対象としたイベントについて、(iii) SNS のアカウントについて、(iv) その他の場について尋ねた。
- ④阿部・今野 (2005; 2007) によって作成され、「現時点での自分に対して感じる全体的な評価であり、日常生活の出来事などに

対応して変動するもの」としての状態自尊感情を測定する。1 因子構造であり、9 項目で構成されている。すべての項目得点の合計を尺度得点とする。5 件法 (あてはまる: 5, どちらかというあてはまる: 4, どちらともいえない: 3, どちらかというあてはまらない: 2, あてはまらない: 1) で回答を求めた。

⑤回答者の性別、性的指向を尋ねた。

①～③の詳細な内容は表 2 にまとめた。

4. 倫理的配慮

本研究は大正大学研究倫理委員会の承認を受けている (承認番号: 22-26 号)。

本調査では CO 直後や現在における CO 相手との関係性について尋ねるため、過去の不快な経験や心理について想起し、それによりストレスを感じる可能性がある想定され

表 2 質問票項目群①～③の詳細

①カミングアウト経験について尋ねる項目群

カミングアウト経験の有無→「ある」「ない」「答えたくない」

「ある」と答えた場合: そのカミングアウトは自発的に行ったものか→「はい」「いいえ」、友人の場合は回答者から見て「異性」か「同性」か

「ない」と答えた場合: カミングアウトを行おうと思ったことはあるか→「ある」「ない」

カミングアウトをした、もしくはしていない理由→自由記述

②カミングアウトをした相手との関係性について尋ねる項目群

カミングアウト直後の相手の反応→相手はカミングアウトを受容したか「はい」「いいえ」「その他(自由記述)※1

※1. 「その他」の場合は、直後の相手の反応についての記述にのみ着目し、受容的もしくは非受容的で分類した。

カミングアウトをしてからの時間→おおよその経過年数 (自由記述)※2

※2. 「1 年未満」「1 年以上 5 年未満」「5 年以上 10 年未満」「10 年以上」の 4 群に分類した。

カミングアウトをした相手との現在の関係性→「良い」「まあ良い」「あまり良くない」「良くない」※3

※3. サンプルサイズが小さかったため「良い」「まあ良い」を合わせて「良い」、「あまり良くない」「良くない」を合わせて「悪い」とした。

③当事者コミュニティなど、あえてカミングアウトをしなくてもセクシュアリティを隠さずに居られる場について尋ねる項目群

自助グループやサポートグループへの参加経験→「ある」「ない」

性的マイノリティ当事者を対象としたイベントへの参加経験→「ある」「ない」

上記それぞれ「ある」と答えた場合: ①そのグループ/イベントがどのようなものか (自由記述)

②どの程度参加して良かったと感じるか→「良かった」「まあ良かった」

「あまり良くなかった」「良くなかった」

③良かった、あるいは良くなかったと感じる理由 (自由記述)

自身のセクシュアリティを公表している SNS のアカウントを持っているか→「持っている」「持っていない」「SNS を利用していない」

「持っている」と答えた場合: ①そのアカウントは匿名か→「匿名」「非匿名」

②現実での知り合いとそのアカウントで交流があるか→「ある」「ない」

その他の場について: グループやイベント、SNS 以外にセクシュアリティを隠さず居られる場はあるか→自由記述

た。また、CO 経験の無い場合にはその理由を尋ねるため、想定する CO 対象に対する陰性感情があった場合にその感情を想起し、ストレスを感じる可能性があった。よって、調査協力者を募集するための文面と質問票の冒頭にそれらのリスクについて明記した。回答を依頼する際にも、無理のない範囲で回答してもらおうことや、心理的苦痛などを感じた場合にはいつでも回答をやめられることを調査内容と併せて説明した。また、回答者のセクシュアリティについて尋ねる項目では、筆者が用意した選択肢に当てはまらない、あるいは当てはめたくない人もいることを予測し、それらの項目に自由記述欄を設けた。

なお、本研究に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

結果

1. 尺度信頼性

まず状態自尊感情尺度を構成する項目において信頼性検定を行ったところ、十分な信頼性が確認されたため ($\alpha = .886$, $\omega = .892$)、各項目得点を合計して尺度得点を算出した。

2. CO と自尊感情の関連

親・友人・パートナーそれぞれに対し、CO 経験がある者を分析対象とした。CO 直後における相手の反応と現在の相手との関係性に関連があるか検討するためにクロス集計を行い、CO の結果と自尊感情との関連を調べるためにブルンナー・ムンツェル検定を行った。

それぞれの人数は、親への CO 経験がある者は 21 名 (シスジェンダー 3 名、トランスジェンダー 9 名、Xジェンダー 4 名、その他 5 名)、友人への CO 経験がある者は 26 名 (シスジェンダー 6 名、トランスジェンダー 9 名、Xジェンダー 7 名、その他 4 名) だった。パートナーへの CO 経験がある者は 19 名だったが、データに不備があった

め 18 名分のデータ (シスジェンダー 3 名、トランスジェンダー 8 名、Xジェンダー 2 名、その他 5 名) を分析した。

CO を行ってから年数は、親への CO で 1 年以上 5 年未満と 5 年以上 10 年未満が各 7 名で最も多く、続いて 10 年以上が 4 名、1 年未満が 2 名であった (不明 1 名)。友人への CO では 5 年以上 10 年未満が最多で 9 名、続いて 1 年以上 5 年未満が 8 名、10 年以上が 4 名、1 年未満が 3 名であった (不明 1 名)。パートナーへの CO では 1 年以上 5 年未満と 5 年以上 10 年未満が各 7 名で最も多く、続いて 10 年以上が 3 名、1 年未満は居なかった (不明 1 名)。

また、CO をした友人の性別は、回答者から見て同性が 11 名、異性が 14 名、無回答が 1 名であった。

2-i. 親への CO

クロス集計の結果、親への CO では直後の親の反応と現在の関係性の間に有意な中程度の連関が認められた ($\chi^2(1, N=21) = 4.295$, $p = .038 < .05$, $V = .452$)。残差分析の結果、親の反応が受容的であった群では現在の関係性が良い人数が有意に多く ($p = .038$)、関係性が悪い人数は有意に少なかった ($p = .038$)。また、現在の関係性が悪い群では親の反応が非受容的であった人数が有意に多く ($p = .038$)、現在の関係性が良い群では有意に少なかった ($p = .038$)。CO 結果と自尊感情の関連では、反応が受容的であった群と非受容的であった群との間での状態自尊感情得点に有意な差は認められなかったが、現在の親との関係性が良い群と悪い群においては、現在の関係性が良い群の方が有意に状態自尊感情得点が高かった ($t(17.315) = 2.690$, $p = .015 < .05$, $r = .428$ [.017, .703])。

2-ii. 友人への CO

友人への CO では直後の反応と現在の関係性の間に完全な連関が認められ ($\chi^2(1, N=26) = 26.000$, $p = .000 < .001$, $V = 1.000$)、友人の反応が受容的であった群は全員現在の

関係性が良好であり ($p = .000$), 非受容的であった群は全員現在の関係性が悪かった ($p = .000$)。しかし CO 結果と自尊感情の関連については、直後の相手の反応と現在の関係性どちらにおいても有意な差は認められなかった。

2-iii. パートナーへの CO

パートナーへの CO では、直後の相手の反応と現在の関係性の間に有意な連関は認められず、CO 結果と自尊感情の関連については直後の相手の反応と現在の関係性どちらにおいても有意な差は認められなかった。

3. CO 促進要因

CO をした理由を尋ねる自由記述項目への回答を分析した。

CO をした理由を尋ねる項目に回答した人数は、親への CO で 17 名、友人への CO で

21 名、パートナーへの CO で 19 名であり、それぞれ 18, 28, 15 のコードが生成された。

親への CO を促進する要因を分類した結果、「遂行への意欲」「クローゼットで生きる限界」「相手からの促し」「機会の到来」「治療に関する動機」の 5 つのカテゴリが見出された。友人への CO を促進する要因では、「相手への信頼」「知ってほしい欲求」「伝えるのが当然」「することのメリット」「非積極的な遂行」「目的意識」の 6 つのカテゴリが見出された。パートナーへの CO を促進する要因では「知ってほしい欲求」「カミングアウトの必要性」の 2 つのカテゴリが見出されたほか、「交際前に知っていた」というカテゴリが見出されたが、厳密には CO 促進要因とは言えないため、見出されたカテゴリをまとめて示した図 (図 1) には示さなかった。

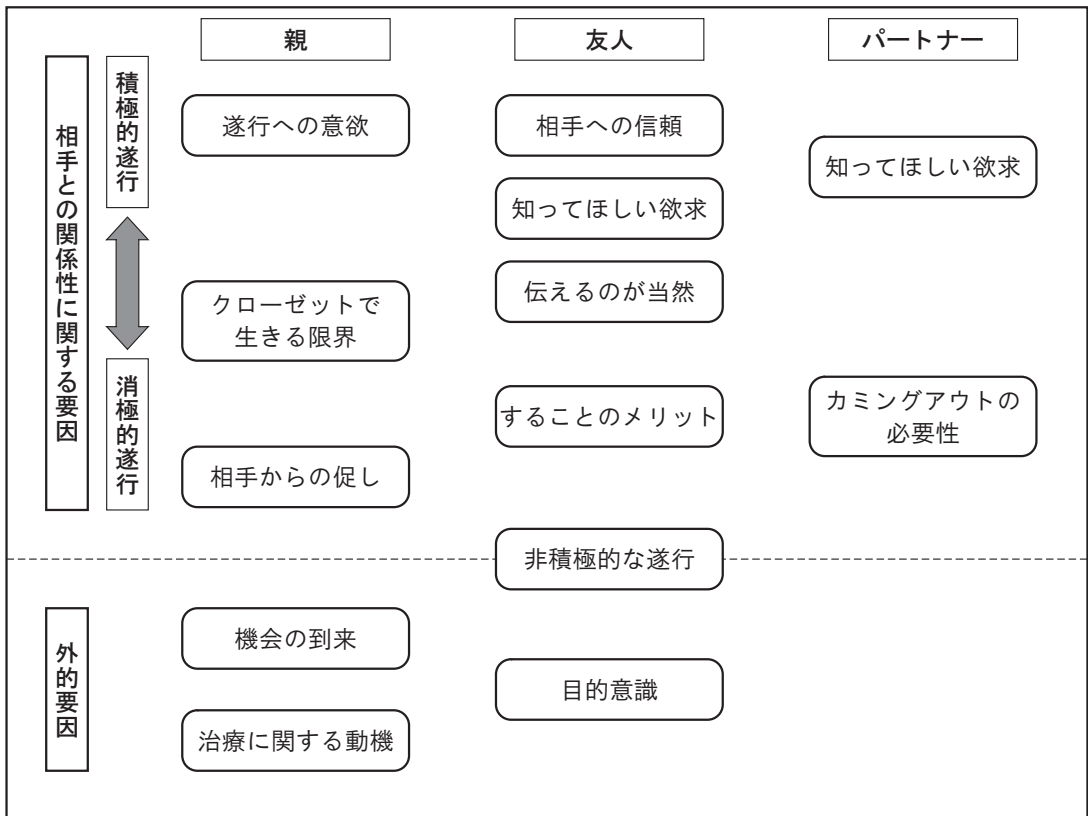


図 1 カミングアウト促進要因

4. CO抑制要因

続いて、COをしていない理由を尋ねる自由記述項目への回答を分析した。

COをしていない理由を尋ねる項目に回答した人数は親へのCOで7名、友人へのCOで1名、パートナーへのCOで2名であり、それぞれ14, 1, 2のコードが生成された。

親へのCOを抑制する要因を分類した結果、「親の偏見」「理解を得られないという予想」「関係悪化の懸念」「機会のなさ」「不必要という考え」の5つのカテゴリが見出された。友人、パートナーへのCO抑制要因はいずれも「不必要という考え」に分類された。

5. セクシュアリティを隠さず居られる場

あえてCOをしなくてもセクシュアリティを隠さずに居られる場について尋ねる項目への回答結果を以下に示した。なお、いずれの場にも参加していない者は3名おり、彼らと何らかの場に参加している者との間で自尊感情の差があるか調べるためブルンナー・ムンツェル検定を実施したが、有意な差は認められなかった。

5-i. 自助グループ・サポートグループ

性的マイノリティ当事者を対象としたグループへの参加経験がある者は12名だった。

参加経験者が挙げたグループの内訳としては、当事者や支援者が運営する団体によって開催されている交流会やその団体名が多く挙げられていた。オンライン上のコミュニティや大学のサークルを挙げる者もあり、サポートグループを挙げた者はごく少数だった。また、グループへの参加経験の有無による自尊感情の有意な差は示されなかった。

グループ参加への満足度は全員「良かった」(9名)か「まあ良かった」(3名)であった。その理由を分析した結果、グループへの肯定的な意見において「情報交換」「カミングアウトの手助け」「安心感」「受容体験」の4つの小カテゴリと、前者2つが含まれる『情報収集の場』、後者2つが含まれる『情緒的サポート』という2つの大カテゴリ

が見出された。否定的な意見では、他の参加者のハラスメント意識に関する居心地の悪さがあった。

5-ii. イベント

性的マイノリティ当事者を対象としたイベントへの参加経験がある者は17名だった。

参加経験者が挙げたイベントの内訳としては、東京レインボープライドや関西レインボーフェスタといったパレード等を行う大規模イベントが多く挙げられたほか、当事者団体等が運営する交流イベントや性的マイノリティ関連の映像作品の上映会、クラブイベントが挙げられていた。また、イベントへの参加経験の有無による自尊感情の有意な差は示されなかった。

イベント参加への満足度は全員「良かった」(12名)か「まあ良かった」(5名)であった。その理由を分析した結果、「当事者同士の気楽さ」「心の支え」「イベントの楽しさ」「当事者との出会い」「学びを得られる」「当事者以外へのアピール」の6つのカテゴリが見出された。

5-iii. SNS

自身のセクシュアリティを公表しているSNSのアカウントを所持している者は24名だった。そのアカウントが匿名である者は17名で、そのアカウントで現実での知り合いと交流がある者は12名、ない者は5名だった。アカウントが非匿名である者は7名で、現実での知り合いとの交流がある者は6名、ない者は1名だった。また、アカウント所持の有無およびアカウント形式(匿名か否か、現実での知り合いとの交流の有無)いずれにおいても、自尊感情の有意な差は示されなかった。

5-iv. その他の場

グループやイベント、SNS以外に自身のセクシュアリティを隠さずに居られる場がある者は12名おり、サークルや職場など自身が所属しているコミュニティやパートナーの家族の前、当事者が集まるバーやクラブなど

のほか、日常的にオープンにしているという回答が見られた。また、こういった場の有無による自尊感情の有意な差は示されなかった。

考察

本研究では、CO が当事者にとってどのようなものであるかを明らかにし、当事者に対する心理的支援を考える糸口を掴むことを目的とし、CO 経験の実態および CO が周囲の人々との関係に与えた影響、そしてその経験が性的マイノリティ当事者の自尊感情にどのような影響を与えるかを検討した。

1. CO と自尊感情の関連

CO と自尊感情の関連を調べたところ、CO 直後の相手の反応による差は親・友人・パートナーいずれにおいても認められなかった。よって、「親や友人、パートナーなどの身近で重要な他者から CO を受容されたという経験がある性的マイノリティ当事者は、そうでない当事者と比べて CO 経験想起時の状態自尊感情が高い」という仮説は支持されなかったと言えるだろう。しかし、親への CO では現在の関係が良い方が状態自尊感情が有意に高いという結果が示され、また親と友人については CO 直後の相手の反応が受容的か否かが現在の関係性と関連している。今回の結果からは CO そのものが自尊感情に直接的な影響を与えるとは言えないが、相手によっては CO をした相手との関係性が自尊感情に影響を与え、その関係性には CO への相手の反応が関連しているということが示されている。

ただし友人への CO における直後の相手の反応と現在の関係性については、本研究ではサンプルサイズの小ささゆえか完全な連関が示されており、結果の一般化は難しいと考えられる。

2. CO の促進および抑制要因

CO を促進する要因は、相手別に計 13 個

のカテゴリに分類され、鈴木 (2018) や田中ら (2021) において示されている相手に自身のセクシュアリティを知ってほしいという気持ちや相手から適切な扱われ方をされたいという欲求や、丸井 (2020) が示した結果と同様に CO せずに生きることに限界を感じて CO をするという相手との関係性に関する要因が示されている。相手との関係性に関する要因には、知ってほしいなど積極的な遂行だけでなく相手から促されるなど当事者自身は消極的な遂行が見出された。また、治療や交際相手の紹介など何らかの目的やきっかけが生じたといった外的な要因も、本研究においては見出された。

一方で CO を抑制する要因としては、田中ら (2021) で示されているような相手との関係が悪化することへの懸念のほか、それと関連しているであろう、相手の偏見により理解を得ることが難しいだろうという予想が見出された。また、CO の機会がないことや、そもそも CO の必要がないからしないといった意見も本研究では示されている。性的マイノリティ全員が CO をしたいと思っているわけではないということは、性的マイノリティ当事者を支援するうえで念頭に置いておくべきだと考えられる。相手の偏見や理解を得ることが困難という予想、関係悪化への懸念が示されたのは親への CO 抑制要因のみだったことから、やはり親に対する CO は精神的なハードルが高いのだということが推察される。先述したように、親への CO では相手の反応の影響も受けるであろう現在の関係性が自尊感情に影響を与える可能性が示唆されているため、親へ CO を行う際の支援や CO した後の親との関係調整において支援の必要があると考えられる。

また、本研究においてトランスジェンダーは全員が親・友人に対して CO を行っており、パートナーに対しても、パートナーが居たことのない場合を除いて全員が CO を行っていたことから、トランスジェンダーが

CO を行う確率はシスジェンダーに比べて高い可能性がある」と推測される。シスジェンダーが挙げなかった CO を行う理由として「治療に関する動機」があるため、未成年のトランスジェンダーが身体的な治療、あるいは精神療法などを受ける場合に親の同意が必要であることが、トランスジェンダーの CO 率の高さの理由の一つだと考えられる。治療に際して CO を行う時の支援が、トランスジェンダーへの支援に求められることが示唆される。

3. セクシュアリティを隠さず居られる場

CO をしなくてもセクシュアリティを隠さずに居られる場としてグループ・イベント・SNS・その他の場という観点で検討を行ったが、いずれの場においてもそれらの場への参加が自尊感情に与える影響は認められなかった。参加経験のある者となない者それぞれに自尊感情の高い者と低い者がおり、こういった場に参加することが自尊感情を高めるとは言い難いようである。

しかし、グループやイベント参加の満足度に関する調査結果を分析することで、参加することの心理的なメリットが明らかとなった。自助・サポートグループ等のグループは、情報収集の場としての機能に加えて安心感や受容体験など情緒的サポートが得られる場としての機能もある。このことから、グループに参加してセクシュアリティを隠さないありのままの自分を受け止めてもらえるという経験を通じて、性的マイノリティの精神状態に良い影響を与えることができる可能性が示唆されている。また、イベントにおいても、当事者と出会い、当事者同士の気楽な雰囲気や心の支えが得られるということが、性的マイノリティにとってポジティブな影響を与えると予測される。しかし、グループに対する意見では居心地の悪さが満足感を低下させる可能性も示唆されているため、グループやイベントを運営する側には環境整備が求められるだろう。

結論

本研究で得られた結果からは、親への CO では現在の親との関係性が良い方が性的マイノリティの自尊感情は高くなること、そして親および友人については CO 直後の相手の反応が受容的だと現在の関係性が良くなる可能性が示唆されている。このことから、CO 直後の反応が受容的であったかどうかより現在の関係性が良いかが性的マイノリティの自尊感情に影響を与えると推察され、CO を行った相手との関係調整が性的マイノリティへの支援において求められると考えられる。特に、親への CO を抑制する要因として理解を得られないことによる関係悪化の懸念が認められたため、親に CO した後の関係調整などの対応が必要である可能性が示唆される。

また、自身のセクシュアリティを明言する CO をしない場合の受容体験については、本研究では自尊感情との関連は示されなかった。しかし、グループにおける受容体験やイベントで心の支えが得られていることが示されたことから、グループやイベントでの経験が性的マイノリティの精神状態にポジティブな影響を与える可能性が考えられる。

本研究の課題と展望

本研究では縁故法や当事者コミュニティを通じて協力者を募り、なおかつオンライン上でデータ収集を行ったため、調査対象者の属性や SNS を含むコミュニティ参加経験の有無等において偏りのあるものだったと考えられる。今後、当事者コミュニティだけでなく当事者が集まるクラブやバー、医療機関などの協力も得て、今回アプローチできなかった、より多様な属性を持つ当事者らの回答も含めて検討していく必要があると考えられる。

また、本研究の調査ではCOに関する項目の直後にセクシュアリティを隠さずに居られる場について尋ね、その後で状態自尊感情を尋ねている。これにより、状態自尊感情がCOについてのみを想起した場合と異なっている可能性も考えられる。今後COに関する研究とそれらの場に関する研究を分け、もっと焦点を絞って検討する必要があるだろう。

文献

- 阿部美帆・今野裕之(2007)．状態自尊感情尺度の開発，パーソナリティ研究，**16**(1)，36-46．
- 針間克己(2014)．セクシュアリティの概念 針間克己・平田俊明(編著) セクシュアル・マイノリティの心理的支援—同性愛，性同一性障害を理解する— 岩崎学術出版社 pp.15-25．
- Heatherton, T. F., & Polivy, J. (1991). Development and validation of a scale for measuring state self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**(6), 895-910.
- 東 優子・中尾美樹(2015)．世界性の健康学会「性の権利宣言」，社会問題研究，**64**，59-62．
- 石丸徑一郎(2005)．性的マイノリティにおける受容体験と自尊心—カミングアウトの効果に関する実験的検討—，コミュニティ心理学研究，**9**(1)，14-24．
- 石丸徑一郎(2022)．LGBTQ+の生きづらさとメンタルヘルスの諸課題，精神医学，**64**(8)，1069-1073．
- 金田智之(2003)．「抵抗」のあとに何が来るのか？—フーコー以降のセクシュアリティ研究に向けて—，年報社会学論集，**2003**(16)，126-137．
- 川野健治(2018)．質的研究とは何か，小児保健研究，**77**(6)，638-640．
- 桐原奈津・坂西友秀(2003)．セクシャル・マイノリティとカミング・アウト，埼玉大学紀要．教育学部．教育科学，**52**(2)，121-141．
- Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. K., & Downs, D. L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**(3), 518-530.
- 丸井淑美(2020)．性的少数者の学校生活の実態と学校教育の課題に関する研究—女性同性愛，男性同性愛，性同一性障害(性別違和)の当事者インタビュー調査より—，日本健康相談活動学会誌，**15**(2)，143-152．
- Money, J. (1965). *Sex research; New developments*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. New Jersey: Princeton University Press.
- 佐々木掌子・尾崎幸謙(2007)．ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成，パーソナリティ研究，**15**(3)，251-265．
- 清水裕士(2016)．フリーの統計分析ソフトHAD：機能の紹介と統計学習・教育，研究実践における利用方法の提案，メディア・情報・コミュニケーション研究，**1**，59-73．
- Stoller, R. J. (1964). A contribution to the study of gender identity. *International Journal of Psychoanalysis*, **45**, 220-226.
- 鈴木 綾(2018)．FTMトランスの「カミングアウト」における，可視化と受容のポリティクス，岩手大学大学院人文社会科学研究所研究紀要，**27**，35-54．
- 鈴木文子・池上知子(2020)．カミングアウトによる態度変容：ジェンダー自尊心の調整効果，心理学研究，**91**(4)，235-240．
- 武内今日子(2021)．「Xジェンダーであること」の自己呈示—親とパートナーへのカミ

ングアウトをめぐる語りから、ジェンダー研究：お茶の水女子大学ジェンダー研究所年報, (24), 95-112.

田中みどり・今城周造(2021). 性的マイノリティの自己受容とカミングアウトの関連性の検討, 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, **23**, 59-74.

内田知宏・上埜高志(2010). Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討—Mimura & Griffiths 訳の日本語版を用いて—, 東北大学大学院教育学研究科研究年報, **58**(2), 257-266.

謝辞

本調査にご回答・ご協力いただいた皆様, そして論文執筆に際しご指導いただいた主査の青木聡先生, 副査の柴田康順先生, そして紀要関係者の方々に心より御礼申し上げます。